

平成 30 年 9 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17212

研究課題名(和文)大規模コホートを活用した、思春期におよぶ学校不適應への早期支援方法の解明

研究課題名(英文)Study for school adaptation of adolescent from the cohort study perspective

研究代表者

磯 笑子(田中笑子)(Iso Tanaka, Emiko)

筑波大学・医学医療系・研究員

研究者番号：40727278

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、学校不適應などのウェルビーイングに影響する、乳幼児期の関連要因を明らかにし効果的な早期支援方法を明らかにすることである。
生涯発達とエンパワメントの視点から、育児環境や子ども自身の力を引き出し、地域とのつながりを促進する取り組みが学校不適應予防などウェルビーイング促進に貢献する可能性に基づき、支援を要とする子どもと養育者への早期支援プログラム開発と検証を行った。子どもの状態と子どもを取り巻く環境の要因、家族と子どもの属性要因等の影響を踏まえて検討した結果、乳幼児期の育児環境、子どもの睡眠習慣等の生活習慣や社会とのかわりが思春期に及ぶウェルビーイングを促進する可能性が実証された。

研究成果の概要(英文):This research aims to shed light on the relevant factors of infancy that affect well-being, such as school maladjustment, and uncover effective early support methods. From the perspective of lifelong development and empowerment, and based on the possibility that childcare environments and efforts to bring out the child's strengths and promote ties with the local community will contribute to the improvement of well-being (such as school maladjustment prevention), we developed and verified an early support program for children and caregivers in need. As a result of taking into consideration the child's condition, environmental factors surrounding the child, the effects of the family and child's attributes, and so on, we have proven that childcare environments during infancy, the child's lifestyle, such as sleeping habits, and the child's relationship with society can improve his or her well-being up through puberty.

研究分野：生涯発達

キーワード：コホート研究 社会性 ウェルビーイング 次世代育成 思春期 学校不適應 介入研究 コミュニティ・エンパワメント

1. 研究開始当初の背景

子どもと養育者をとりまく社会的環境が急激に変化する中で、虐待や発達障害、社会的不適応など特段の配慮を要する子どもと養育者は増加傾向にある。近年の虐待報告件数の急増、学童期思春期における学校不適応への対応は喫緊の課題である。現状では、子どもの安全確保が最優先となり、社会的養護による家族の分離や、学校における不適応児の教室からの排除などが主流であり、学校不適応に至る前に、子どもや養育者を支援する取組みは必ずしも十分ではない現状がある。特に、経年的な大規模データを用いて、就学後の子どもの育ちまで追跡することでリスク要因と促進要因を明らかにし、早期支援効果を検証した研究は国内において乏しい状況である。

学童期、思春期の心身の不調、非行など広義の学校不適応は、抑うつや反社会的行動など、より深刻な社会的問題と密接に関連することが指摘されている。このため、問題が深刻化し、子どもの社会的排除に至る前の予防的介入の視点が重要である。米国の Adverse Childhood Experiences (ACE) Study は、虐待など小児期の逆境体験がその後の自殺など、将来の健康に影響することを報告している。生涯発達の視点からは、乳幼児期の環境がその後の生涯に及ぶ発達、健康に長期的に影響することが明らかになっている。一方で、貧困、虐待、発達障害などの配慮を要する場合においても、家族機能や地域とのつながりは、発達や心身の健康状態を促進する可能性が指摘されており、子どもや家族、コミュニティの力を引き出すエンパワメントの視点から、効果的な支援モデルを作成し、検証することが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学校不適応などの学童期、思春期のウェルビーイングに影響する、乳幼児期の関連要因を明らかにし効果的な早期支援方法を明らかにすることである。

生涯発達とエンパワメントの視点から、育児環境や子ども自身の力を引き出し、地域とのつながりを促進する取り組みにより、将来の学校不適応を予防する可能性を検証する。子どもと養育者の特性に注目し、支援を必要とする子どもと養育者への早期支援プログラムを開発、実証することより、乳幼児期から、学童期、思春期をつなぐ根拠に基づく子育て支援システムの仕組みづくりに貢献することが期待される。

3. 研究の方法

学童期、思春期の学校不適応およびウェルビーイングに影響する要因について、文献レビューに基づきエビデンステーブルを作成した。

有効な早期支援に関する実践事例について、質的に事例収集、整理し、地域との連

携に着目しながら、実践例の蓄積と類型化を行った。平成 27 年度に実施できなかった海外の先進機関への訪問調査を平成 28 年度および平成 29 年度に実施し、「当事者を巻き込み、地域とともに実施可能」という観点から、地域の中で思春期の子どもの育ちを支援するシステムについて関連する施設、機関を訪問するとともに、日本の研究成果を報告し、支援システムと評価に関する討議を行った。

個別インタビュー法およびフォーカス・グループ・インタビュー法を用いて、学童期、思春期の子どもをもつ養育者、保育士、保健師、学校関係者、地域学童クラブ職員など、国内外の思春期に及ぶ子育て支援に関わる専門職等 40 名を対象にインタビュー調査を実施し、支援のニーズ、将来のニーズを抽出した。

コホートデータを活用した、学童期、思春期の影響要因の特定

平成 28 年度は、昨年度に実施した量的研究と文献レビューで得られた影響要因の重要性に加え、質的研究により、有効な早期支援に関する実践事例を蓄積、類型化を行った。特に、社会とのかかわりなど、地域とのつながりが子どものウェルビーイングに及ぼす可能性について、質的研究の成果を踏まえ、量的研究による根拠と、質的研究による根拠を統合し、「当事者を巻き込み、地域とともに実施可能」という観点から、専門職との討議を重ね、専門職との協働により、早期支援プログラム案の作成、パイロットスタディ、支援プログラム実施と評価を計画、実施した。

早期支援プログラム開発に向けた根拠の提示を目的として実施した多変量解析を実施した。具体的には、コホートデータを用いて幼児期の育児環境、貧困、虐待、仲間関係、気になる行動、地域・社会とのかかわりなどの予測される影響要因について、発達や、学童期以降の学校不適応に及ぼす複合的な影響を、経年的な多変量解析により検討した。量的解析により、養育者への社会的サポートが乳幼児期の育児環境の改善に関連すること、乳幼児期の育児環境に加え、学童期の社会とのかかわりが学童期および思春期の精神的健康に関連することが示唆された。また、海外のコホート研究のレビュー、乳幼児期および学童期の養育環境の特徴について文献検討やインタビューによる情報収集の結果を踏まえ、乳幼児期から思春期におよぶ育児環境や社会的サポートの構造と影響度について質的、量的観点から検討した。

学童期、思春期の学校不適応とウェルビーイングを評価する手法の開発と妥当性検証

1 で作成したエビデンステーブルを踏まえ、学童期、思春期の子どもと養育者を対象とした、質問紙調査および PC 実験などを用いた認知バイアス、内受容性に関する調査を行い、86 名からデータを収集し、統計解析により評価の妥当性を検証した。乳幼児期から連続する学童期、思春期の社会性と学校適

応の評価では、文献レビューに基づき3因子30項目から成る社会的スキル尺度を作成し、妥当性信頼性を検証した。

子どもと環境とのかかわりについては、続いて、学童期、思春期の社会とのかかわり能力を評価するため、地域コホートデータを用いて、社会とのかかわり指標を作成し、健康関連QOLとの関連を検討した。

介入支援を意図して、思春期の認知バイアスおよび思春期の内受容性と学校適応およびウェルビーイングの関連を検討した。

子どもと環境とのかかわりについては、続いて、学童期、思春期の社会とのかかわり能力を評価するため、地域コホートデータを用いて、社会とのかかわり指標を作成し、健康関連QOLとの関連を検討した。

コミュニティを活用した支援モデルの作成と効果検証

質的量的研究の結果を統合し、支援モデルを作成するとともに、育児環境支援や地域とのつながり促進など、子どもからみた広義の環境に対する介入と支援が子どもの学校適応およびウェルビーイングに及ぼす効果を検証した。

4. 研究成果

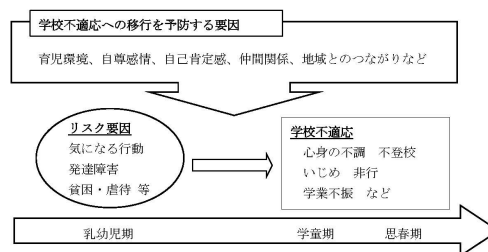
生涯発達とエンパワメントの視点から、育児環境や子ども自身の力を引き出し、地域とのつながりを促進する取り組みにより、将来の学校不適応を予防する可能性を検証した。質的、量的検討に基づき、子どもと養育者の特性、社会とのかかわりに注目した支援モデルを作成した。

支援ニーズについては、～の調査研究により、健やかな育ちを保障する環境づくりと保護者への支援のニーズおよび実践例として、安全、安心、衛生の保証など、子どもたちが安全に楽しく過ごせる環境づくりを推進し、子ども自身の情緒を安定させること、地域の実情に適した支援やサービスの提供、子どもと保護者の個別的な支援ニーズの理解、親子の関係性への理解と支援など、家族の生活の質向上、ファミリーウェルビーイングの実現を目指していく取り組みが抽出された。さらに、地域および社会との協働として、多様な支援ニーズに対する偏見や認識のずれの解消など、保護者や社会との相互理解の促進、子ども家庭支援に関するニーズ調査や学術的調査、支援情報の発信、地域の実情に適した支援サービス提供、緊急時のバックアップ体制構築、既存資源の活用など、地域および社会との相互理解促進と協働を目指していく取り組みが抽出された。

学童期、思春期の子どもと環境とのかかわり、子どもの心身の状態、学校適応、ウェルビーイングを評価に向けた評価指標開発と妥当性検証では、高い内的一貫性($\alpha=0.87$)およびSDQ(Strength and Difficulty Questionnaire)との相関($r=0.30\sim 0.49$)を示した。生活習慣との関連では、就寝時間

が遅いほど、有意に社会的スキル得点が低い傾向が示された。本研究の結果より、学童期社会的スキル尺度の信頼性および基準関連妥当性が確認された。子どもと環境とのかかわりの継続評価指標の妥当性、信頼性については、社会とのかかわり得点が高いほど、総合的なQOL得点および、自尊感情、友達関係、学校生活の領域得点が高い傾向が示された。社会とのかかわり行動は、個人の社会能力により創発されるものであり、学童期、思春期におよぶ多角的な社会能力および環境との相互作用評価の可能性が高まった。

今後は、さらなる妥当性担保のため、対象数を増やし、因子的妥当性や併存的妥当性の検証が必要である。また本指標をコホート研究に活用し、乳幼児期からの連続的な社会能力発達の軌跡と影響要因検証を継続する予定である。



最終年度は、開発した支援プログラムの実施調整、モデルの評価を実施した。海外の研究機関と協働し、心理学、脳科学、生理学的見地から有効と考えられる、学童期および思春期のアセスメントおよび介入方法に関する研究開発に向けて研究討議、資料収集と整理、評価ツール開発と予備的検討を行った。続いて、保護者に対する調査、専門職に対するインタビュー調査、子どもに対する質問紙調査および認知機能特性、内受容感覚等に関する調査を行い、学童期、思春期のウェルビーイングに関する多角的な調査と多変量解析を実施し、影響要因を検討した。評価の妥当性の検証と並行して、子どもと養育者の特性別に、コホートデータを用いた支援効果に関する評価を行った。子どもを取り巻く環境や、家族と子どもの属性要因の影響を踏まえてウェルビーイングへの影響を検討した結果、乳幼児期の育児環境に加え、子どもの睡眠習慣等の生活習慣や社会とのかかわりが学童期および思春期のウェルビーイングを促進する可能性が実証された。

また、思春期の内受容感覚や認知特性は学童期および思春期の精神的健康に関連する可能性が示されたことより、今後は、地域社会とのかかわり、生活習慣、心と体の調和を促進する支援プログラム開発の必要性が示された。

今後、青年期までを視野に入れたより長期的な健康、社会適応支援を目的として、早期支援および介入に関するプログラムを開発、実証することより、乳幼児期から、学童期、

思春期、青年期をつなぐ根拠に基づく子育て支援システムの仕組みづくりに貢献することが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

Anne T, Tanaka E, Watanabe T, Tomisaki E, Watanabe K. Child development and the care environment: longitudinal perspective. *Advances in psychology research*, 116, 197-205, 2017. 査読有.

Nurdiantami Y, Watanabe K, Tanaka E, Pradono J, Anne T: Association of General and Central Obesity with Hypertension, *Clinical Nutrition*, 2017 年 5 月アクセプト、印刷中. 査読有.
加藤慶子、田中笑子、渡邊久実、渡辺多恵子、富崎悦子、安梅勅江：就学前の子どもの睡眠リズムと就労する養育者のストレスに関する研究、*日本保健福祉学会誌*、24(1)、13-21、2017. 査読有.

渡邊久実、田中笑子、安梅勅江：ライフコースアプローチによる思春期の Well-being 実現に向けた要因解明、*発達科学*、31、215-220、2017. 査読有.

Chen W, Tanaka E, Watanabe K, Wu B, Anne T: The influence of home-rearing environment on children's behavioral problems 3 years' later, *Psychiatry Research*, 244, 185-193, 2016. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.psychres.2016.07.043>. 査読有.

富崎悦子、平野真紀、田中笑子、渡辺多恵子、伊藤澄雄、奥村理加、安梅勅江、コミュニティ・エンパワメント展開のためのニーズ把握 - 3 年間での推移 - 厚生 の指標、63 (12) 34-42、2016. 査読有.

Anne T, Tanaka E, Watanabe T, Tomisaki E, Mochizuki Y. Does Center-based Childcare Play a Role in Preventing Child Maltreatment? Evidence from a One-year Follow-up Study. *International Journal of Applied Psychology*, 6(2), 31-36, 2016. 査読有.

Tanaka E, Zyu Z, Watanabe T, Tomisaki E, Wu B, Anne T. The Relationship between Parental Stress and Child-Rearing Behaviors: Using the Cloud Computing-Based Support System for Comprehensive Childcare. *The World Engineering Conference and Convention 2015 Proceedings*, PS7-6-51, 1-6, 2015. 査読有.

Tong L, Shinohara R, Sugisawa Y, Tanaka E, Watanabe T, Anne T. The buffering effect of parental engagement on the relationship between corporal

punishments and children's emotional/behavioral problems. *Pediatrics International*, 57(3), 385-392, 2015. 査読有.

Anne T, Tanaka E, Watanabe T, Watanabe K, Ito H, Kasai T. Effectiveness of an Interactive Community Empowerment Program. *The Journal of MacroTrends in Health and Medicine*, 3(1)72-80, 2015. 査読有.

[学会発表](計 14 件)

渡邊久実、田中笑子、安梅勅江：ライフコースアプローチによる思春期の Well-being 実現に向けた要因解明、*発達科学*、2018. 査読有.

Tanaka E, Watanabe T, Tomisaki E, Sawada Y, Watanabe K, Anne T: Changes in childrearing environment and prevention of maltreatment for pre-school children: Evidence from the 15 years Cohort Study, 21st International Epidemiological Association, World Conference of Epidemiology, Omiya, 2017. 査読有.

Tomisaki E, Tanaka E, Watanabe T, Anne T, Monitoring of children's development World Conference of Epidemiology, 21st International Epidemiological Association, World Conference of Epidemiology, Omiya, 2017. 査読有.

Sawada Y, Tanaka E, Watanabe T, Shimozato M, Ito S, Kasai T, Anne T: Factors related to subjective physical fitness of schoolchildren: A longitudinal study, 21st International Epidemiological Association, World Conference of Epidemiology, Omiya, 2017. 査読有.

田中笑子、富崎悦子、渡辺多恵子、澤田優子、渡邊久実、安梅勅江：乳幼児期の養育者支援が子どもの発達に及ぼす影響、第 27 回日本疫学会総会、甲府、2017. 査読有.

伊藤澄雄、渡辺多恵子、渡辺久実、田中笑子、富崎悦子、奥村理加、安梅勅江、幼児期の自己効力感を育む運動支援の 9 年後の Subjective Well-being への効果、第 76 回日本公衆衛生学会総会、鹿児島、2017. 査読有.

澤田優子、田中笑子、渡辺多恵子、富崎悦子、安梅勅江、周産期からの追跡研究による 3 歳までの発達リスクが学童期の育児環境に及ぼす影響、第 76 回日本公衆衛生学会総会、鹿児島、2017. 査読有.

富崎悦子、田中笑子、渡辺多恵子、育児支援が子どもの育ちに及ぼす影響、第 76 回日本公衆衛生学会総会、鹿児島、2017. 査読有.

Tanaka E, Tomisaki E, Watanabe T, Watanabe K, Meiryandah Hilda, Anme T: The relationship between stress response and early child care environment in school-aged children, The 31st International Congress of Psychology, 2016. 査読有.

田中笑子, 渡辺多恵子, 富崎悦子, 渡邊久実, 伊藤澄雄, 奥村理加, 安梅勅江: 学童期の精神的健康に関連する要因の検討 コホートデータを用いて, 第75回日本公衆衛生学会総会, 2016. 査読有.

田中笑子, 渡辺多恵子, 富崎悦子, 渡邊久実, 伊藤澄雄, 奥村理加, 安梅勅江: コホートデータを用いた思春期の社会性定量化とその後の精神的健康への影響の検討, 第74回日本公衆衛生学会総会, 2015. 査読有.

田中笑子, 富崎悦子, 渡辺多恵子: 子どもをたたく養育者の行動変容に関連する要因の検討, 日本保育学会第68回大会, 2015. 査読有.

Emiko Tanaka, Taeko Watanabe, Etsuko Tomisaki, Tokie Anme. The Internet revolution and childcare quality: Enhancing evidence-based child care and research, The World Engineering Conference and Convention (Kyoto), 平成27年12月. 査読有.

田中笑子, 安梅勅江. 木育ブランディングとエンパワメント, 第74回日本公衆衛生学会(長崎), 平成27年11月. 査読有.

〔図書〕(計6件)

Emiko Tanaka, et.al. Implementations, 21-33, In Tokie Anme ed. Empowerment Science for professionals Enhance Inclusion and A World of Possibilities, 1-60, Japan Pediatric Publication, 2018.

田中笑子, 安梅勅江: 3章3節 親子の関係に関する要因、育てにくさの理解と支援(秋山千枝子, 小枝達也, 橋本創一, 堀口寿広 編) 診断と治療社, 78 - 79, 2017.

安梅勅江, 田中笑子, 渡辺多恵子, 富崎悦子, 渡邊久実, 伊東花江, 加藤慶子, 鎌田彩加, 坂田美樹: 根拠に基づく子育て・子育てエンパワメント 子育て環境評価マニュアル実践編(安梅勅江監修) 筑波大学国際発達ケア: エンパワメント科学研究室, 1 - 60, 2017. (ISBN978-4-9905933-2-2)

Anme T, Tanaka E, Watanabe T, Tomisaki E, and Watanabe K: Chapter4 Web Application for Social Skill Development in Children with Autism, Social Skills: Perceptions, Role in Autistic Children and Assistive

Technology(Shaw D Ed), Nova Science Publishers, 51-62, 2016.

Anme T, Tanaka E, Watanabe T, Tomisaki E and Japan Children's Study Group: Parent-child Interactions and Child Social Competence: Longitudinal Evidence Using The Interaction Rating Scale (IRS), Parent-child Interactions and Relationships(Alvarez K Ed), Nova Science Publications, 195-206, 2016. 張羽寧, 森茂起, 田中隆志, 安梅勅江, 福井義一, 田中究, 海野千畝子, 田中笑子, 望月由妃子, 恩田陽子, 富崎悦子, 渡辺多恵子, 有岡菜, 鳴美愛梨, 森年恵, 思春期前期 HOME 評価尺度児童養護施設版実施マニュアル, 甲南大学人間科学研究所, 19-55, 2016.

〔その他〕

ホームページ等

子育て子育てエンパワメントに向けた発達コホート研究

<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/ecd/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 笑子 (TANAKA, Emiko)

筑波大学・医学医療系・研究員・研究者番号: 40727278

(2)連携研究者

なし

(3)研究協力者

安梅 勅江 (ANME, Tokie)

伊藤 澄雄 (ITO, Sumio)

奥村 理加 (OKUMURA, Rika)

田中 裕 (TANAKA, Hiroshi)

酒井 初恵 (SAKAI, Hatsue)

宮崎 勝宣 (MIYAZAKI, Katsunobu)

渡辺多恵子 (WATANABE, Taeko)

富崎 悦子 (TOKISAKI, Etsuko)

澤田 優子 (SAWADA, Yuko)

望月由妃子 (MOCHIZUKI, Yukiko)

恩田 陽子 (ONDA, Yoko)

張 羽寧 (ZHANG, Yuning)

Lau Jenifer (LAU, Jenifer)